Vajra 考 (2)
—石とダイヤモンド —

渡　辺　章　悟

はじめに

インド最古の宗教文献である『リグ・ヴェーダ』(RV) には，「石」を意味する言葉にアシャン (aśan)，アシュマン (aśman)，アシャニ (aśani) という三つの語がある．これらはいずれも動詞の語根√aś に由来し，地上の石ばかりでなく，天空における石を含意する．石は硬く，武器にもなる．したがって，天空の石とは，インドラの武器である雷霆，すなわちヴァジュラと対応する．ヴァジュラはインドラの雷霆であるが，このように天空の石と見なされることもあった．

天空の神によって投げられ雷霆は地上に向下し，稲妻や斧，杵やダンベルの形で石に刻まれ，崇拝されるようになる．一方，放下された地上の石は，最も堅固なダイヤモンドに比定され，煌めく光輝を持った摩尼となる．

後代になると，雷霆の意匠は貨幣に打刻されたりもする．ギリシャでは，それをゼウスの投擲するケラウノスといい，インドでは，ヴァジュラ（金剛杵）といった．

投擲された雷霆はガンダーラを通じてインド文化圏に入り，ブッダを守護するヘラクレスの棍棒から執金剛の手にするヴァジュラとなる．光り輝き，燃え上がるヴァジュラは，異教徒を威嚇する象徴としての武器である．

さらに，外敵を打ち砕くヴァジュラの働きが内化されて，内なる敵を砕く機能を付与される．これは仏教の伝統である三昧から，「ヴァジュラのような三昧」(vajropamasamādhi 金剛喩定) と名づけられた．この三昧こそ，悟りに向かう修行者が最終的な局面で経験する一瞬の三昧である[2]．こうしてヴァジュラの機能と形状は，さまざまに展開したので

ある．

本稿はこのようなヴァジュラの変遷を，石とダイヤモンドを中心テーマとして検討するものである．資料としては『リグ・ヴェーダ』からパーリ三蔵まで，インドの宗教文献を広く渉猟しようとしたつもりであるが，実際には手元にある一部の書を調査したのみにとどまった．読者諸氏の寛恕を願いたい[3]．

1．aśan，aśman，aśani

サンスクリット語で石を意味する語は，upala, grāvan, prastara, pāṣāṇa, śarakara, śilā など多くあるが，ここで問題にするのは，aśan，aśman，aśani という三つの言葉である．特に aśman は石（岩）でありながら，thunderbolt（稲妻）という意味を併せ持つ．その語根は第 5 類動詞√aś で，「到達する，来る，着く，得る，広がる」という意味から導かれる名詞である[4]．また aśan と aśani も石と稲妻にかかわり，aśman と同族語である．

最初の aśan は男性名詞で，『リグ・ヴェーダ』（RV）では石，岩（RV. x , 68 , 8），投石器の石（RV. ii , 30 , 4; iv , 28 , 5）という意味の他，天空，大空，蒼穹，領域（fir-ma-ment）（RV. i , 164 , i ; 173 , 2 ; x , 27 , 15）という意味もある．稲妻という意味はないが，√aś を語源とするために，天空にかかわる意味を持っている．さらに，Grassman [1955 : 137, 139][5] や，Monier [1899 : 112][6] はこの語が aśman に由来すると想定している．

aśman は RV において，aśan とほぼ同義であるが，貴重な石（RV. v , 47 , 3），石製の器具，ハンマー（RV. &c.）と同時に，稲妻という意味を併せ持つ[7]．ベートリンク [1855-1875, 516][8] も天空の投石器，（RV. i.121.9, vii.104.19），天空の〔投石器の〕石（aśmānaṃ svaryam）（RV. v. 30.8, v. 56.4），雷霆という意味を掲載する．モニエルもアプテも〔固い〕石，雷霆，雲，山という意味を指示し，Mayrhofer[1956, 60][9] も aśmā < aśman で石と天空，穹隆の意味をもつとする．

aśani は女性名詞（または男性名詞）で，『リグ・ヴェーダ』などでは雷霆，稲妻や，飛び道具の先，天の弾丸（RV. 4.16.2, x , 87 , 4）という意味がある．また，ヴァラーハ・ミヒラ（Varāha-mihira）の『ブリハット・

サンヒター』(Bṛhatsaṃhitā) では流星 (ūlkā) という意味で用いられる．さらに，Macdonell [1976 : 32][10] では aśani-grāvan でダイヤモンドという意味とする．

Turner [1966 #910] によれば，aśani は aśan に由来するという．いずれにせよ，これら aśan，aśman，aśani は動詞√ aś を語根とする石，あるいは稲妻にかかわる同族の名詞である．

地上の石は，もともと投石器によって投ち放たれた天空の石で，インドラの雷霆，あるいは流星が地上に落ちたものと考えられた．したがって，石を意味する aśman は稲妻の義をも併せ持つことになる．また，aśan と aśani が天空にかかわるものであることも，起源は同じである．語根√ aś の「至る，到達する」という語義も，このようなインドラを介した天と地を結ぶ働きを意味しているのである．

Turner [1966 : 653, #11207] によれば，『ラーマーヤナ』には vajrāśani-「インドラ神の稲妻」といい，さらにこれに -nipāta を付加して「〔インドラ神の稲妻による〕落雷」を意味することもあるという．

次にヴァジュラがどのようなものなのかを示す代表的な例をみてみよう．ただし，『リグ・ヴェーダ』等で，「インドラ神の雷霆」という意味で用いられることは，前稿（「vajra 考」）で詳述したので，本稿では，ウパニシャッド以降における代表的な例を一つだけ補足しておきたい．

2．Aśani と Vajra
——『カタ・ウパニシャッド』と『ブラフマスートラ』

伝統的なインド哲学のなかには，ブラフマン・アートマンの同一（梵我一如）という根本的な教理を解説する際に，このヴァジュラに関説することがある．

黒ヤジュル・ヴェーダのカータカ学派，あるいはタイッティリーヤ学派に属するとされる『カタ・ウパニシャッド』(*Kaṭha Upaniṣad, Kāṭhaka Upaniṣad*) には，ヴァジュラに関する次のような用例がある．

「およそあらゆるこの一切の世界は，出現して生気 (prāṇā) において動揺する (ejati)．［そは］大いなる畏怖，振りかざされたるヴァ

ジュラなり（vajram udyataṃ）．これを知る者たち，彼等は不死となる」<K.Upa. 2-6-2> [12]

この偈頌は，プラーナをブラフマンの表われとみなし，その振動を，自然界でヴァジュラ（雷霆）が発生する天空の状況に喩えるのである．この偈頌はウパニシャッド文献の中でもよく知られたものであったらしく，8世紀に活躍したヴェーダーンタ学派のシャンカラ（Śaṅkara 700-750年頃）作『ブラフマ・スートラ』（1-3-39）の中で，次のように引用されている[13]．

この〔K.Upa. の〕語句は，〔動揺するという〕語根 *ej* が振動（kampana）の意味をあらわすことに従って，［経作者の］注意するところとなった．この章句においては，この一切世界は生気（prāṇa）を拠り所として揺動する．そして振りかざされたヴァジュラ（金剛杵）と名づけられる，或る大いなる畏怖の原因，それを認識することによって，不死性が得られると述べている．

そこでこの生気とは何か，その怖畏を生ぜしめるヴァジュラとは何かが確実でないので，考察がなされるに当たって，まず〔論者は次のように〕提言する．

［論者の主張］広く知られているように，生気（prāṇa）とは五種にはたらく風（vāyu）である．また，まさに広く知られていることから，ヴァジュラは稲妻であろう（prasiddher eva ca-aśanir vajraṃ syāt）．そしてこれは風の偉大さがのべられているのである．どうしてか．この一切の世界は，生気と名づけられる・五つにはたらく・風に安住して，動揺（鼓動）する．またまさに風にもとづいて，大いなる怖るべきヴァジュラが，振りかざされる．何となれば，風が雨雲の状態で旋転する時，電光，雷鳴，雨，稲妻が旋転すると，人々は語るからである[14]．〔中略〕

＜大いなる怖畏，振りかざされたるヴァジュラ＞（mahad-bhayaṃ vajram-udyatam）と，怖畏の原因と認定されることから，まさしく同じもの（梵）が指示されたと，理解される．このヴァジュラという語も＜怖畏の原因＞（bhaya-hetutva）という共通性に基づいて使

用されている．例えば実に「もし私が彼の命令を実行しなかったら，振りかざされたヴァジュラが，まさに私の頭上に墜ちるであろう」[15]という怖畏によって，人々は必ず王等の命令通りに行動するがごとくである．

そしてそのように，火，風，太陽を始めとするこの世界は，まさにこの梵を怖れて，必ず各自の業務（vyāpāra）に行動することになる．であるから，梵は怖れを起こさせるヴァジュラに譬えられる（bhayānakaṃ vajropamitaṃ brahma）．

このように，生気（プラーナ）はブラフマン（梵）であり，そのブラフマンも「怖畏の原因」であるため，ヴァジュラに譬えられたのである．両者は人知を越えた恐怖の対象でもある．特にヴァジュラは，人々の脅威である自然現象としての稲妻（aśani）を意味する．それは「振りかざされたヴァジュラ（金剛杵）が，まさに私の頭上に墜ちる」（vajram udyatam mamaiva śirasi nipatet）とされるように，天空から電光，雷鳴，雨，稲妻，落雷を伴うものである．

これが，中世インドの代表的なヴァジュラの解釈である．本書には前述したように，aśani という語が見られるが，やはり天空の稲妻という意味に留まり，石という意味はみられない．しかし，vajra がなぜ石と関連するのかについては，この語が何らかの示唆を与えてくれるであろう．

3．ケラウノス（keraunos）とヴァジュラ（vajra）

（1）ゼウスのケラウノス（Keraunos）

稲妻については，比較文化的視点から Cambridge の文化人類学者 Chr. Blinkenberg が，北欧とギリシャの thunderweapon について詳細な研究を公刊しているので，最初に彼の論書からを稲妻の信仰について概観してみたい[16]．本書において彼は Usner の論文 “Keraunos”（*Rhein. Mus.* 1905, pp.1-30）及び著書 *Götternamen* をたびたび引用し，古代ギリシャ宗教の稲妻（lightning）に関する概念を，以下の三つに分類する．

① 天から地へ向下する神として，それぞれ個別に崇拝される稲妻

(*Augenblicksgott*)

② 雷鳴と稲妻という特定の神として崇拝される稲妻 (*Sondergott*)

③ 天空の神の権能としてゼウスに委譲される稲妻 (*Zeus Keraunions, etc.*)

これら稲妻についての三つの局面は，①から③の三段階で信仰が展開するという説であるが，後者が前者を打ち消すことなく，特にギリシャを周辺地域で残存しているとし，さらに，神としての稲妻の崇拝はマケドニアに保持され，そこからヘレニズムの影響とともにアジア諸国にまで広がったと推定している．

この書で特に注目されるのは，ケラウノス（keraunous）の展開である．古代ギリシャにおいてこの電撃（thunderweapon）は，「ゼウスのケラウノス」といわれ，それが稲妻を模したジグザグ型の刻印，斧（axe）型の石（thunderstone）として，王座や祭壇に置かれ，具象的な崇拝対象となっていた[17]．

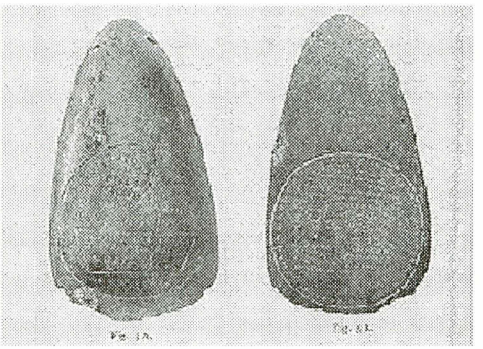

図 1 [Vettersfeld 出土の thunderstone-amulet]（Blinkenberg [1911, 16].）

また Blinkenberg によれば，BC700 頃のギリシャの詩人ヘシオドス（Hesiod）が，ゼウスの武器である雷霆について，「超越的な力を持つその斧は，火の鬼神（デーモン）が造った．彼はそれを投げたか，忘れたままにした」(『神統記』*Theogony* 140, 501 偈）と述べているという．この箇所を実際の『神統記』に見ると，以下のようになっている．

「いつの日か，［彼自身が父であるウラノス（天空）の陰部を切り取って無力化したように］自らの息子によって打ち倒される」という定めを怖れた父クロノス（時）は，生まれたばかりの子供を呑み込んでしまった．それに怒ったクロノスの姉妹であり妻であるレアが，息子のゼウスを洞窟に隠し一命を救った．ゼウスは成長すると，クロノスに反抗して呑み込んだ兄弟・姉妹をはき出させ，縛られていた父の兄弟達を解き放った．これを感謝して彼等はゼウスに雷鳴と稲光を贈った．なお，彼等三人は一つ眼の巨人キュクロプス(Cyclopes)，すなわち Brontes（雷鳴），Steropes（雷光），Arges（閃光）であり，それぞれが雷鳴，雷光，雷，星，輝き，生命力を意味する．こうした武器を備えることによって，ゼウスは「死すべき者どもと不死の神々」の上に君臨することができるようになったのである．(493-506 偈)[18]

このことからゼウスは，「アストラピオス」（Astrapios 電光を投げる），「ブロントン」（Bronton 雷鳴を轟かす）という称号を持つ[19]．そしてゼウスが地上に残したものが，すなわちケラウノスによって超越的力を付与されたものが，聖なる力を持つ石として崇拝されたのである．このようにケラウノスは天上と地上を結ぶ聖なる遺物といえるのである．

こうして，インドのインドラ神が持つヴァジュラがアシャス（aśas）として，稲妻でもあり，石でもあったように，ギリシャのケラウノスは雷霆であり，かつ堅固な石として崇拝された．これはインドラとゼウスが天空と地を支配する神格であり，かれらに付せられた武器であるからこそ，二つの世界に共通の実体を想定するに至ったのであろう．

このギリシャのケラウノスは，エペイロスのアレクサンドロスの硬貨（紀元前 332 年頃）では，その紋章として表される．次頁の図版のように多くは表がゼウスで裏にケラウノス（図２），あるいは，表がアテナ神で裏にケラウノス（図３）が描かれる．前者は B.C.344 ～ 336 年，後者は B.C.214 ～ 212 年の鋳造で，いずれもシチリア島のシラクサ出土であり，ΣVPAKOΣION の文字が微かに見える．前者はケラウノス（雷霆）と大麦の穂が右側に見える．後者のケラウノスは翼のある雷霆である．

図２［シラクサ（Siracusa）出土，ゼウス(表)とケラウノス(裏)］

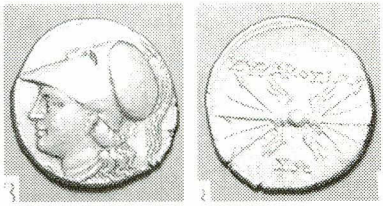

図３［シラクサ（Siracusa）出土，アテナ神(表)とケラウノス(裏)］

この紋章はガンダーラを経由して，インド・バクトリアの諸王に採用される．例えば，ディオドトス王（Diodotus 在位 B.C.256-230）の硬貨では，左手には革製の盾（アイギス），右手には雷霆（ケラウヌス）を振りかざす裸体のゼウスが描かれる（図４）．

メナンドロス王（Menandoros 在位 B.C.155-130 ca）の４ドラクマ銀貨では，ゼウスの娘アテナ神が左手にアイギス，右手にゼウスの雷霆を握る（図５）．その形はまさに金剛杵である．

図４［ディオドトス１世または２世（表），ゼウス神（裏）］[21]

図５［メナンドロス１世（表），アテナ神（裏）］[22]

この紋章はサカ・パルチアの時代を経由して，紀元一世紀のクシャーナ朝時代のコインまで続き，インドラ（帝釈天）のヴァジュラ（金剛杵）と混交し，それから派生したと見られる執金剛のヴァジュラへと展開する．このケラウノスが密教の法具，金剛杵へと展開した問題に関しては，近年意欲的な研究が相次いで刊行されている[23]．

4．ヴァジュラ（Vajra）とダイヤモンド（Diamond）

（1）adamas, adamant-, diamant-

Vajra の英訳語に diamond があるが，その他に adamant という古語もある．この語は名詞で「堅固なもの」という意味の他に，形容詞で「堅固無比の，誘惑に動かされない」という意味がある．元々の語源はラテン語 adamant-, adamas（hard as steel , m. the hardest steel），ギリシャ語 ad áamas に由来する．ラテン語の ada- は後期ラテン語になると dia- と変化したため，adamant- は diamant- という語に変形したのである[24]．ギリシャ語でいうと，この語は否定詞 a と「馴らす，征服する，加工する」を意味する damaō, damaxō いもの」の意味で，鋼鉄と金剛石の両義があった．

紀元 77 年に博物誌を書いたローマの学者プリニウス（Plinius［XXXⅦ15 §55 sq］）[25] は，この adámas について，「水晶にある類似をもつインド産の adámas」として言及し，「単に宝石の中のみでなく，人間の所有物中で最高の値がある」と言う．当時はインドが唯一の金剛石の産地であり，紀元後 1 世紀頃にはインド西海岸のバカレー（Bakare）からエジプトあるいはローマに輸出されていた[26]．注目されるのはこの金剛石の意味の転化である．プリニウス［Plinius§61］によれば，その無比の光輝と堅さのために金剛石には解毒や恐怖鎮静の作用があると考えられ，anancites（「克服者」）の名前が生じたことが伝えられている[27]．この〔煩悩の〕「解毒・鎮静」から「克服者」という内的な意味に転化したことは重要である．プリニウスの記述は vajra が adámas であったことを保証するものではないが，もしインドにおいて vajra（金剛石）にこのような意味が知られていたなら，その後の vajra のイメージに大きな影響を与えた可能性もある．

ただし，ヴァジュラを一端「金剛」と漢訳すれば，そこには雷霆（らいてい）という意味も，克服者という意味もない．にもかかわらず漢訳仏教圏ではこの金剛という漢訳が定着したことから，ヴァジュラは堅固なもの，外的から守護する金剛石という意味で理解された．そして，その堅固な属性から cutting vajra という以外，それから転化した鎮静するものという意義や本来の攻撃的な武器という意味は薄れているようである．

（2）Kauṭilīya Arthaśāstra（『実利論』）のダイヤモンド（vajra）

紀元前3世紀ごろにマウリヤ王朝の創始者チャンドラグプタ（B.C. 317-293 ca）の宰相だったカウティリヤ（Kauṭilya）が編纂されたと伝えられる『実利論』（*Arthaśāstra*）には，古代インドの国家組織と社会生活の具体像が描かれている．その中には，ダイヤモンド（vajra）について以下のように言及されている[28]．

1）鉱物の分類と鉱山長官の仕事

「金，銀，ダイヤモンド，マニ，真珠，珊瑚，螺貝，金属，塩，土，岩，液体から生ずる金属―以上が「鉱山」［の項目に入る］．（2.6.4）

「鉱山長官は，螺貝，ダイヤモンド，マニ，真珠，珊瑚，腐食剤の工場を作らせ，またそれらの取引をさせるべきである．」（2.13.27）

2）貴金属庁における金属長官の仕事

「そして，鉄と銅の精錬法を知るべきである．それ故，ダイヤモンド，マニ，真珠，珊瑚から作られる製品に関する損失や，金銀製品に要する分量をも［知るべきである］．」（2.13.58-59）

3）ダイヤモンドの産出地

「ダイヤモンド（vajra）は，サバーラーシトラ（sabhārāṣṭra），タッジャマーラーシトラ（tajjamārāṣṭra），カースティーララーシトラ（kāstīrarāṣṭra），シュリーカタナ山（śrīkaṭana），マニマンタ山（maṇimanta），インドラヴァーナ（indravāna）で産出する」（2.11.37）

「鉱山・川・その他がその出所である」（2.11.38）

4）ダイヤモンドの色と形状

「猫目の色，シリーシャ（śirīṣa）の花の色，牛脂の色，純粋な水晶の色，ムーラータの花の（mūlāṭī）色，諸々の宝珠のうちのどれか一つの色．―以上がダイヤモンドの色である．」（2.11.39）

「大きく，重く，衝撃に耐え，角が均一で，器物に線条を描くことができ，紡錘のように回転し，燦然と輝く［ダイヤモンド］が賞讃される．」（2.11.40）

「角がなく，縁がなく，歪のものは賞讃されない．」（2.11.41）

5）金銀細工師の仕事

「それ故，［金銀細工師は，］ダイヤモンド，マニ，真珠，珊瑚の製

品の，種類，外見，色（または品質），量，［それから作られる］装飾，特徴を理解すべきである.」(2.14.43)

6) 税関長官の仕事—ダイヤモンドの価格について

「螺貝，ダイヤモンド，マニ，真珠，珊瑚の首飾りについては，それぞれの専門家より，仕事の量・機関・賃金に関する契約を結んで，［価格を査定］させるべきである.」(2.22.5)

7) ダイヤモンドの扱い

「金，銀，ダイヤモンド，マニ，真珠，珊瑚，馬，象を扱う商人は，５０［パナ］の税を払うべきである.」(5.2.17)

8) ダイヤモンドの輸送経路

「毛布・皮・馬のような商品を除けば，螺貝，ダイヤモンド，マニ，真珠，金などの商品は，南路においてより豊富であるから.」(7.12.24)

「南路の場合も，多くの鉱山があり，高価な商品があり，周知のルートであり，わずかな出資と労力しか要しない商路のほうがすぐれている.」(7.12.25)

9) 陣形としてのヴァジュラ

「前方からの攻撃に対してはマカラ陣をとって行進すべきである．後方からの攻撃に対しては車陣をとり，両側からの攻撃に対しては金剛陣をとり，一切の方向からの攻撃に対しては全方位超勝陣をとって行進すべきである．一列縦隊［しかとれない地形］の場合は，針陣をとって行進すべきである」(10.2.9)

「分散陣は，両翼・両脇・胸が結合していないことから［こう呼ばれる］.(10.6.34)

「それは，五部分がとる形状に応じて，金剛（ヴァジュラ）または蜥蜴（ゴーダー）となる.」(10.6.35)

以上のように，ヴァジュラは貴重な貴金属として，「ダイヤモンド，マニ，真珠，珊瑚」，のように，あるいはこれらに，「金，銀，螺貝」を加えて常に纏まって述べられる．これらの引用のように，ダイヤモンドは鉱物として採掘され，幾つかの貴金属と同じように一定の価格が決められて，製品として市場で売られ，人々の身体を飾るまで，1）鉱山長官，2）金属長官，6）税関長官の管理下に置かれた.

その税は，糸や衣服などを扱う商人の４０パナ，穀物，飲料，金属などの商人の３０パナ，ガラス商人などの２０パナなどに対して，7）では５０パナであり，その高価であることが推測できる[30]．その少量にして高価であることから，秤と升の標準として用いられるようになるのである．

ダイヤモンドの 2）産出地に関して，詳細は不明であるが，サバーラーシトラ，タッジャマーラーシトラ，カースティーララーシトラ，シュリーカタナ山，マニマンタ山，インドラヴァーナなどの鉱山が知られる．その 8）輸送経路に関しては，通商路の場合も，水路には沿岸路と外洋路，あるいは河川路があり，より危険度の少ない沿岸路と河川路がすぐれていること．また陸路はヒマラヤ路（北路）と南路があり，その両者を比べると，ダイヤモンドは南路の地域から産出されたと推測される．

なお，その堅固さと五角形という形状から，9）陣形としても用いられ，『マハーバーラタ』にも登場する．

（３）パーリ三蔵中のダイヤモンド（vajira）

初期の仏典ではダイヤモンドとしてのヴァジラ（P. vajira）の用例はほとんど見られない．そもそも，パーリ三蔵を見ても vajira という語の用例は，筆者の管見する限り，固有名詞をのぞいて 30 例程度であるから，そう多い方ではない[31]．それらを大別すると，1）インドラ神の武器としての雷霆，金剛杵（Jātaka IV-234, Mahāvaṃsa 30, 95 etc.）と，2）ダイヤモンドという二つの意味であり，そのなかでも金剛石としての用法は，かなり限定されたものである．

それは，vajira が多くの宝石の一つとして並列的に述べられるか，宝石の中で最も堅固であるため，「摩尼珠（maṇi）などを打ち砕くように」として，比喩的に用いる場合かのどちらかに分かれる．以下にはダイヤモンドとして用いられる四つの例を挙げておこう．

1）Dhammapada『法句経』[PTS, Khd.N., P24]
attanā va kataṃ pāpaṃ attajaṃ attasambhavaṃ,
abhimanthati dummedhaṃ vajiraṃ v' asmamayaṃ maṇiṃ. (*Dhammapada* 161, PTS24)

「自分がつくり，自分から生じ，自分から起こった悪が，劣慧者を打ち砕く．金剛石が
宝石を打ち砕くように．」（中村元訳『法句経』岩波書店，1978, p.32）

2）Milindapañha [PTS 118]
yatha mahārāja mahiyā bāhuvidhā maṇayo vijjanti, seyayathidaṃ: indanīlo mahānīlo jotiraso veeriyo ummāpuppho sirīsapuppho manoharo suriyakanto candakanto vajiro khajjopanako phussarāgo lohitaṅko masāragallo'ti. Ete sabbe atikkamma cakkavattimaṇi aggamakkhāyati.
「大王よ，たとえば，地中に多くの種々なる宝石があるとしよう．すなわち，インダニーラ（サファイヤ），マハーニーラ（大サファイヤ），ジョーティラサ（スターサファイヤ），ヴェールリヤ（琉璃），ウンマープッパ（亜麻花），シリーサプッパ（アカシヤ花），マノーハラ（魅惑），スリヤカンタ（愛しき太陽），チャンダカンタ（愛しき月），ヴァジュラ（ダイヤモンド），カッッジョーパナカ，プッサッラーガ？（黄色サファイヤ），ローヒタンカ（ルビー），マサーラガッラ（キャッツアイ，猫目石），これらすべてよりも転輪王のマニ宝珠は勝れ，最上であると認められている．」（中村元訳 vol.2, pp.20-21）

3）Milindapañha [PTS 268]
atthi suvanṇaṃ rajataṃ muttā mani saṅkho silā pavāḷaṃ lohitaṅko masāragallaṃ veriyo vajiraṃ elikaṃ kālalohaṃ tambalohaṃ vaṭṭalohaṃ kaṃsalohaṃ
「金・銀・真珠・摩尼＜珠＞・螺貝・宝石・珊瑚・ルビー・馬瑙・瑠璃・ダイヤモンド・水晶・鉄・銅・真鍮・青銅が存在する．」（中村元訳 vol.3, p.12）

4）Milindapañha [PTS 278]
vajiraṃ atitikhiṇatāya vijjhati maṇimuttāphaḷikaṃ.
「ダイヤモンドがすばらしい力によって摩尼珠・真珠・水晶を切断する（ごとく）」（中村元訳，vol.3, p.38.）

以上のように，わずか二つの典籍の限定的な用例ではあるが，ここでは多くの宝石が並記される中で，vajira もそのうちの一つの金剛石（ダイヤモンド）としてあげられる．確かにこれらの譬喩は，vajira が他の宝石を摧断する堅固な力を持つことに喩えられてはいるが，明らかに電撃とは異なり，鉱物を意味しているに違いない．ここに引用した『法句経』や『ミリンダパンハ』の成立年代を考えると，少なくとも紀元前２～３世紀にはヴァジラはダイヤモンドと見なされていたのである．

ただし，一般的にいえばヴァジュラはダイヤモンドではない．『世記経』（139b）等にあるように，須弥山世界の外側の際にそびえる〔大〕金剛輪山が「金剛のように固く，壊すことができない」とするように，堅固なものとして述べるにすぎない．別の箇所や別訳『起世経』では「〔大〕金剛山，金剛囲，斫迦羅」（S. cakravāḍa）（大正 1, 116a, 312a）と訳されるし，『倶舎論』（大正 29, 57b）などで「鉄輪囲山」などと訳されるように，「金剛」を具体的な素材として限定することはできない．実際，『世紀経』では，他の七山と同じく七宝からなるとされる．

初期仏典の一般的な用例としては，あくまでインドラの雷霆であり，ヴェーダ神話からの伝承をほぼそのまま受け継いでいる．このことは，これまでの研究によって，ほぼ明らかになっていることではあるが，本稿の最後に，補記としてその代表例を記しておくこととする．

補記　「パーリ三蔵中の電撃としての vajira」

パーリ三蔵中の vajira という語のうち，ダイヤモンドとして用いられるのは前述したように極めて例外的なものである．以下にはインドラ神のヴァジュラ（Pāli: ヴァジラ vajira）という神話が，仏典にどのように反映されているのかを確認しておこう．

１．インドラの異名（vajira-pāṇi，vajira-hatta，vajira-āvudha）

ヴァジラはインドラ神の武器としての電撃，あるいはそれを具象化した金剛杵（JātakaIV.234，Mahavaṃsa30, 95 etc.）であるが，なかには複合

語としてインドラ神の異名となるものがある．インドラ神の異名とは，(1) vajira-pāṇi-, (2) vajira-hatta[32], (3) vajira-āvudha[33] という三種である．このうち，前の二つは「vajra を手に持つもの」であり，最後は「vajira を武器とするもの」という意味である．いずれにしても，vajira はインドラの持ち物であり，ヴェーダ以来の用法といえる．しかし，vajirapāṇi-（金剛手）は，仏典においてはヤクシャ（yakṣa 薬叉・夜叉）の王として登場し，インドラと同じく釈尊を守護し，異教徒を威嚇するという役割を持つ．密迹金剛力士，執金剛，持金剛（薬叉，鬼神）とも漢訳され，表の守護神であるインドラから独立し，裏の守護者（シークレット・ガードマン）となる．以下には，その vajirapāṇi-yakkha の例を挙げておく．

・Dīgha Nikāya Ambaṭṭha-sutta（PTS DN vol.1, p.95）

Tena kho pana samayena vajirapāṇi yakkho mahantaṃ ayokūṭaṃ ādāya ādittaṃ sampajjalitaṃ sajotibhūtaṃ ambaṭṭhassa māṇavassa uparivehāsaṃ ṭhito hoti: sacāyaṃ ambaṭṭho māṇavo bha-gavatā yāvatatiyakaṃ sahadhammikaṃ pañhaṃ puṭṭho na vyākarissati etthevassa sattadhā mu-ddhaṃ phā-lessāmīti. Taṃ kho pana vajirapāṇim yakkha bhagavā ceva passati ambaṭṭho ca māṇavo.

本経では阿摩昼（あまちゅう）（Ambaṭṭha）という名の摩納（māṇava）—青年，若者，特にバラモンの青年—にブッダが彼の種性の由来を先輩のバラモンから聞いているかどうかを尋ねた．しかし，その摩納は沈黙して答えなかった．そこで「ブッダが三度まで答えを促して答えなかった者は，頭が七つに裂ける」とブッダが忠告するという話があり，これに続いて金剛手夜叉（P.vajirapāṇi yakkho; Skt. vajrapāṇir yakṣo）が，輝き渡り，燃え上がり，焔光を放つ「偉大なる鉄槌」（mahantaṃ ayokūṭaṃ ..... ādittaṃ sampajjalitaṃ sajotibhūtaṃ）を執って，アンバッタの頭上の空中に立ち，ブッダの先の語を繰り返すのである．

漢訳もほぼ同じであるが，微妙な相違もある．『長阿含』「「阿摩昼経」で登場する密迹金剛力士は，金剛杵（vajra）を手に持ち，ブッダの左右に控える鬼神（yakṣa）として描かれる．また，『増一阿含』（大正 2，663c）でも類似の話を掲載する．本経では，梵天（ブラフマー）が如来の右，釈提桓因（インドラ）が如来の左にあって，手に拂（子）を執る．

さらに，密迹金剛力士が如来の後ろにあって，手に金剛杵を持つとされる．

また，Majjhima Nikāya（PTS, MN vol.1, pp.231-232）にも以下のような同類の話が見られる．

> tena kho pana samaye vajirapāṇī yakkho āyasaṃ vajiraṃ ādāya ādittaṃ sampajjalitaṃ sajoti-bhūtaṃ saccakassa nigaṇṭhaputtassa uparivehāsaṃ ṭhito hoti: " sacāyaṃ saccako nigaṇṭhaputto bhagavatā yāvatatiyaṃ sahadhammikaṃ pañhaṃ puṭṭho na byākarissati. etthevassa sattadhā muddhaṃ phālessāmī"ti.
> taṃ kho pana vajirapāṇiṃ yakkhaṃ bhagavā ceva passati, saccako ca nigaṇṭhaputto. atha kho saccako nigaṇṭhaputto bhīto saṃviggo lomahaṭṭhajāto bhagavantaṃyeva tāṇaṃ gavesī, bhagavantaṃ etad avoca: pucchatu maṃ bhavaṃ gotamo, byākarissāmīti.

このMNの例は前のDNとほぼ骨格が同じである．DNとMNの用例の相違は，主人公がDNでは若いバラモン僧のAmbaṭṭhaとするのに対し，MNではジャイナの修行者（ニガンタ派）の論客Saccaka（Skt. satyaka）であること，vajiraがDNでは“大いなる鉄の槌”（mahantaṃ ayokūṭa）というのに対し，このMNでは“鉄の金剛杵”（āyasaṃ vajiraṃ）とする点である．いずれにしても，これらの語にかかるādittaṃ sampajjalitaṃ sajotibhūtaṃ（輝き渡り，燃え上がり，焔光を放つ）については両者ともにまったく同じであるばかりでなく，「ブッダから三度質問されて解答できない場合には，即座に頭が七つに裂かれる」とする点，さらには主人公の出生の話も同様である[35]．

ここで注目すべきなのは，MNではvajiraという語が用いられ，しかもDN, MNともに鉄製（ayokūṭa, āyasa）であること，それは燃え上がり，光輝くということ，さらにそれを持った「金剛手夜叉が上方の（upari）空中に（vehāsaṃ）立つ（ṭhito）」と表現することである．これらは虚空とヴァジュラの深い関連，さらに言えば，雷鳴や稲妻を想起させるに十分な表現であると考える．

もちろん，この話のもととなるヴェーダ文献では，主人公はインドラ

であり，この神こそが vajira を武器とし，敵を七つに切り裂く権能者である．仏典ではその話の骨格を受容しつつ，主人公をブッダの守護者である金剛手（P. vajirapāṇi）とし，彼を鬼神・薬叉（P. yakkha）と変容させたのである．なお，ここでは vajira は鉄製の武器である．

このような発展を遂げたインドラとヴァジュラは，「般若経」などの大乗経典において，神々の主シャクラ（śakro devānām indraḥ 釈提桓因，帝釈天），カウシカ（Kauśika 憍尸迦）と呼ばれ，釈尊の威神力によって仏弟子たちに説法する．また，『二万五千頌般若』には守護尊としての執金剛夜叉（vajrapāṇi- mahāyakṣa-）も僅かではあるが登場する．

さらに密教経典になると多くの固有名詞となって，経典中に溢れるようになり，金剛薩埵のように，大日如来に代わり説法する菩薩も登場する．また，ナーラーヤナ（那羅延）などと結びついて，堅固なものの象徴ともなる．この問題については別の論文で刊行予定である[36]．

キーワード：アシャス，インドラ，ダイヤモンド，ケラウノス，プリニウス，稲妻，金剛杵，密迹金剛

【注釈】

[1] 本稿は「Vajra 考」（『東洋学論叢』第 31 号，2006.3, pp.21-36）の続編である．なお，本稿の続編として，「Vajra 考補遺—ナーラーヤナの周辺から—」（『智山学報』56 輯，2007）を刊行予定である．

[2] 金剛喩定に関しては「Vajropamasamādhi の考察」（『印度学仏教学研究』54-1, 2005, pp.196-204）及び，「最終解脱へ向かう三昧—『大般若波羅蜜多経』における金剛喩定—」（『印度哲学仏教学』20, 2005, pp.38-57）を参照されたい．

[3] *Ṛg-Veda* については、前稿に引き続き，Nooten & Holland [1994] を用いた．本稿はヴァジュラとはいかなるものであるかを問題にした．特に，いかにしてヴァジュラがダイヤモンドになったか，またケラウノスがヴァジュラの形状にどのように影響したかなどを明らかにしたつもりである．しかし，残念ながら，高野山大学の室寺義仁教授からお送り頂いた，T. K. ダスグプタの研究『ヴァジュラ—ヴェーダの武器』（Tapan Kumar Das Gupta, *Der Vajra, eine vedische Waffe,* Alt- und Neu-Indische Studien herausgegeben vom Seminar für Kultur und Geschichte Indiens an der Universität Hamburg16, Wiesbaden, 1975）を本稿に生

かす余裕がなかった．本書はすでに30年以上も前にkeraunosとvajraについて初めて本格的に論じている．筆者未見の多くの資料が引用され，ヴァジュラの形態に関する豊富な図版も掲載されている．本稿の論旨を補ってあまりある労作である．合わせて参照して戴ければ幸甚である．

[4] √aś は第9類では「飲む，食べる，味わう，楽しむ」という意味である．

[5] Hermann Grassman, *Wörterbuch zum Rig-Veda,* Otto Harassowitz:Wiesbaden, 1955.

[6] M. Monier-Williams, *Sanskrit-English Dictionary, Etymologically Philologically Arranged with Special Reference to Cognate Indo-European Languages,* Oxford University Press, 1899.

[7] ホイットニー文法（Whitney, W. D., *Sanskrit Grammar,* Leipzig, 1924 Repr. Motilal Banarsidass: Delhi, 1989, p.159）のヴェーダ語の不規則変化（§425e），あるいはマクドーネル（A. Macdonell, *A Vedic Grammar for Students,* Oxford University Press:Oxford, 1916, Rep., 1941, p.69）によれば，man語幹の七つの語で，syncopateすなわち（中間音節を略して）短縮するばかりでなく，Inst., sg.を作るとき，mあるいはnを落とす例が指摘される．この規則によれば，mahi-mn-āがmahi-nāとなるように，aśmamnāはaśmanāとなる．

[8] O. Böhtlingk und R. Roth, *Sanskrit-Wörterbuch,* Herausgeben von der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften, Neudruck der St. Petersburg Ausgabe von 1855-1875. Reprint in Delhi, 1990.

[9] Manfred Mayrhofer, *Kurzgefates etymologisches Wörterbuch des Altindischen, A Concise Etymological Sanskrit Dictionary,* Heidelberg, 1956.

[10] A. Macdonell, *A Practical Sanskrit Dictionary,* Oxford University Press, 1976.

[11] R. L. Turner, A *Comparative Dictionary of the Indo-Arya Languages,* 1966 (Reprint in Motilal Banarsidass: Delhi, 1999).

[12] yad idaṃ kiṃ ca jagat sarvaṃ prāṇa ejati niḥsṛtam/ mahad bhayaṃ vajram udyataṃ ya etad vidur amṛtāste bhavanti//（V. P. Limaye and R. D. Vadekar eds., *Eighteen Principal Upaniṣads,* Poona, 1958, p.25.）

[13] *Brahmasūtra Śaṅkarabhāṣya,* ed. by S. H. Śastri, Vidyabhawan Sanskrit Granthamala no.124, Chowkhambha Vidyabhawan:Varanasi, 1977, pp.287-288, l.19. 本文の和訳は金倉訳にもとづき，多少の修正を加えたものである．（金倉圓照訳『シャンカラの哲学　上』春秋社，1980, pp.280-283）．また，Böhtlingk [1990] もvajraの項でこの偈頌を引用する．

[14] mahadbhyānakaṃ vajram udyamyate vāyau hi parjanya-bhāvena vivartamāne vidyut-stanayitnu-vṛṣṭy-aśayanayo vivartanta ityācakśate. (*op. cit.*, p.287, *ll.*11-12.)

[15] vajram udyataṃ mamaiva śirasi nipated yady aham asya śāsanaṃ na kuryām. (*op.cit.*, p.288, *l.*17)

[16] Blinkenberg [1911, esp.13-27].

[17] Blinkenberg [1911:15, 27] によれば，現代ギリシャではその斧を「空中の斧」(astropéleki) と呼ぶ．また，この信仰を引き継ぐものとして，クレタ島のクノッソス (Knosos) では両刃の斧 (double-axe) の信仰が広がった．「両刃の斧」は明らかに人間の道具であるが，それはもともと神々の手にあったものとして，ヘシオドスの『神統記』を根拠に引用するという．

[18] Hugh G.. Evelyn-White trs., *The Theogony of Hesiod,* 1914. (http://en.wikisource.org/wiki/ Theogony) を参照した．ただし，この神話はロドスのアポロニオスによれば，オルペウスの伝えた話という（内山勝利編『ソクラテス以前哲学者断片集』第 1 分冊，岩波書店，1996, p.30)．

[19] M. エリアーデ [1991: 282]．なお，ギリシャ語 Astron は星の意．Astr-, Astro- は星，天空の合成語をつくる．Bront-, Bronto- はギリシャ語（brontē 雷）起源であり，bronto-saurus（雷竜），bronto-phobia（雷鳴恐怖）のように，雷の合成語をつくる．

[20] 古代インドの貨幣については，以下の二書がある．John Allan, *Catalogue of the Coins of Ancient India,* London, 1936, 及び Parmeshwari Lal Gupta, *Coins,* 1967. 特に後者は，北西インドの貨幣の記述にすぐれ，和訳も出版されている（P. L. グプタ著，山崎・鬼生田・古井・吉田共訳『インド貨幣史』人間科学叢書 33，刀水書房，2001)．

[21] 『Alexander the Great アレクサンドロス大王と東西文明の交流展』東京国立博物館，2003, p.92, #74.

[22] Op. cit., p.95 #80.

[23] このケラウノスが密教の法具，金剛杵へと展開した問題に関しては，近年意欲的な研究が相次いで刊行されている。古くは以下の二書がある．É. Lamotte, "Vajrapāṇi en Inde," Mélanges de Sinologie offerts à Monsieur Paur Domiéville, Paris, 1966. Tapan Kumar Das Gupta, *Der Vajra, eine vedische Waffe,* Alt- und Neu-Indische Studien herausgegeben vom Seminar für Kultur und Geschichte Indiens an der Universität Hamburg16, Wiesbaden, 1975. 最近では，森雅秀「パーラ朝の金剛手・金剛薩埵の図像学的特徴」『密教図像』16, 1997, pp.35-57. 定方晟「金

剛杵の形の起源」『大法輪』第 70 巻（平成 15 年）第 8 号，pp.174-179. 田辺勝美『仏像の起源に学ぶ性と死』柳原出版，2006, esp., pp.9-13. 田辺勝美「執金剛（像）の起源」『三笠宮殿下米寿記念論集』刀水書房，2004, pp.480-498. その他，大英博物館のカタログ（W. Zwalf, *A Catalogue of the Gandhāra Sculpture in the British Museum,* 2 vols., London, 1996）や，東京国立博物館の特別展カタログ（『Alexander the Great アレクサンドロス大王と東西文明の交流展』）の田辺勝美氏の図版解説も有益である.

24) 寺沢芳雄編『英語語源辞典』（研究社，1997, p.355）diamond の項参照. この diamant はオランダ語，あるいはポルトガル語で diamante というが，日本語の「ギヤマン」というのはこの語が江戸時代に流入したものである.『広辞苑』によれば，江戸時代の『蘭語訳撰』（1810 年）にもギヤマンが金剛石を意味する場合と，ガラス細工を意味する場合があったと記すが，後者はダイヤモンドでガラスを切って細工したことから派生した語と推定される. 余談だが，三菱自動車のディアマンテ(diamante)という車名も同社広報部によれば，光り輝くダイヤモンドからとったスペイン語に由来するという.

25) ガイウス・プリニウス・セクンドス Gaius Plinius Secundus（A.D.23 ～ 79）. 彼の博物誌（Naturalis Historia）の日本語訳には，中野定雄，中野里美，中野美代共訳『プリニウスの博物誌』I ～ III（雄山閣，1986）がある. アダマス（ダイヤモンド）については，その第三巻（pp.1509-1511）に記載がある.

26) バカレーは正確な比定はできないが，コーチンを中心とした西タミル王国，現在のケララ州の北部と見られる. 現在は Madhya Pradesh 州の北部 Panna から，年間 14,542 トン程度産出されている. Cf. Muthiah [1990:165]. また，近年スリランカに近い南インドのコドゥマナル遺跡からは宝石の原石採掘跡が発見されている. このような場所から宝石が加工され，その代わりにローマからは大量の金貨がもたらされた.

27) この金剛石についての記述は村川［1993:260-261］を参照した.

28) R.P.Kangle, *The Kauṭilīya Arthaśāstra*, part 1, Motilal Banarsidass. Reprint Delhi, 1986. 翻訳は，上村勝彦訳『カウティリヤ実利論』(岩波書店，1984) を使用した. なお，*Manusmṛti* では，ダイヤモンドとしての vajra の用例は，わずか一例 (11.58) しか見られない.

29)『実利論』第六章では，すべての陣形を，杖陣・蛇陣・円陣・分散陣の 4 種に大別し（10.6.3），順次説明してゆく. Manu-smṛti（7.191）でも用例がある.

30) そのことは，以下の記述からも窺える.「わずかではあるが高価な品の方が

すぐれている．というのは，ダイヤモンド，マニ，真珠，珊瑚，金，銀の鉱石は，その非常に高い価値により，多量の低価な品を凌駕するからである」と学匠たちは述べる．(7.12.14)

31) 固有名詞としては，コーサラ国王パセーナディ（波斯匿 Pasenadi）の王女の名前でヴァジリー王女（vajirī kumārī），金剛女（vajirī）と比丘尼，金剛女（vajirā）比丘，あるいは将軍名（vajiragga）がある．

32) Dīgha Nikāya, Mahāsamaya-suttanta #20（PTS, DN vol.2, p. 259）

Jitā vajirahatthena samuddaṃ asurā sitā bhātaro vāsavassete iddhimanto yasassino.（金剛手のために打ち負かされたアシュラは海に住む．彼らはヴァーサの仲間であって神通を具えて名声がある．）なお，この部分に対応する漢訳『長阿含経』「大会経」（大正 1, vol.2, 80a28-29）を見ると，明らかにインドラ（跋闍呵諦 vajrahattena; 婆三婆 vāsava）を想定していることがわかる．「爾時。世尊為阿修羅而結呪曰　祇陀跋闍呵諦三物第阿修羅阿失陀婆　延地婆三婆四伊弟阿陀提婆摩天地」（その時，世尊は阿修羅たちのために呪文を結んだ．跋闍呵諦［インドラ］に負けて，海に逃げた．彼らは，〔阿陀？〕大いなる神通力のある神，婆三婆［インドラ］を怖れて．）（『現代語訳「阿含経典」長阿含経』第四巻，平河出版社，2001，p.142 参照）

33) なお，前稿「vajra 考」（p.28-30）で述べたように，RV では vajra-hasta と vajra-āyudha の例はあるが，vajra-pāṇi という用例は見られない．パーリ三蔵では，一般的には vajra-āyudha（ヴァジュラを武器とするもの）とする．なお，vajira-āvudha としては，Vimānavatthu『天宮事経』（PTS Khd.N. p.61）に見ることができる．

so modasi turiyagaṇappabodhano mahīyamano vajirāvudhoriva2（注 2. vajiravudhova - sīmu.）imasu vīṇāsu bahusū vaggusu manuññarūpāsu hadayeritaṃ pati.
（そのあなたは楽団に興じ，楽しんだ．まるでインドラのように恭敬されながら，これら多くの妙なる，楽しい楽器に心は魅せられ，喜んだ．）

34)『長阿含』「阿摩昼経」（大正 No.1, vol.1, 83a）

又告摩納。汝頗從先宿耆舊大婆羅門。聞此種姓因縁已不。時彼摩納默然不對。如是再問。又復不對。佛至三問。語摩納言。吾問至三汝宜速答。設不答者。密迹力士手執金杵在吾左右。即當破汝頭爲七分。

35) MN には『雑阿含』（大正 No.99, vol.2, 36a13ff.）「時有金剛力鬼神。持金剛杵。猛火熾然。在虚空中。臨薩遮尼犍子頭上。作是言。世尊再三問。汝何故不答。我當以金剛杵碎破汝頭。令作七分。佛神力故。」がよく対応する．

[36]「Vajra 考補遺—ナーラーヤナの周辺から—」（『智山学報』福田亮成先生古稀記念論文集，第 56 輯，2007）に刊行予定である．